

様々な見守り支援機器

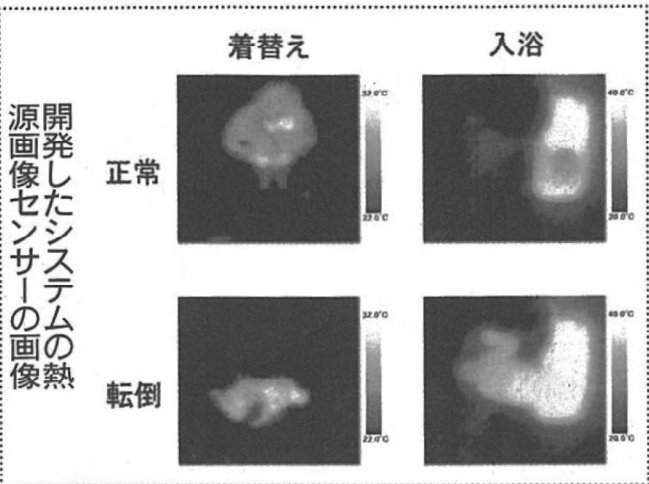
加齢や脳卒中などの疾患による身体機能の低下によって、医療・福祉施設、高齢独居世帯および老老世帯の日常生活場面における転倒・転落事故が増加しており、家族や介護者などによる発見が遅れてしまうと、重症化したり、場合によっては死に至ることもあります。また、転倒・転落しやすくなった対象者の見守りは、家族介護者や施設の介護者の負担が大きいことも明らかになっており、介護者が疲れやすくなる、うつ状態になる、頭痛などの身体症状が現れるなどのケースもあります。

埼玉県立大学准教授 木戸 聡史

トによる生活の質の維持・向上、介護者の負担軽減を目指しています。また、近年では各種センサーで異常を検知して、ネットワークを通じて介護者などへ異常を知らせる見守り支援機器の有用性も示されてきています。

しかし、センサーの種類によっては課題もあり、例えばビデオカメラなどでは、対象者のプライバシー保護が課題

このような課題に対して、厚生労働省では現場のニーズに即した実用性の高い介護ロボットを開発し、介護ロボッ



介護者の負担軽減に効果

になります。ただ、近年では価格やニーズに応じて様々なセンサーが選択できるようになっています。例えば、人感センサーでは対象者の特定範囲での起き上がりなどの動きを感じでき、バイタルセンサーではマツトレスの上下などに設置することで心拍や呼吸などを感知できます。

私の研究室でもプライバシーを保護しながら対象者と介護者の双方に利用しやすい見守りシステムを開発しており、平成29年度から埼玉県の助成を受けて、北海道科学大学、株式会社チノノ、株式会社グローバルソフトウェアとの共同開発により、熱画像センサー・異常検知機能・対象者の状態をスマートフォンなどに表示する機能を備えた、トイレや居室で使用できる見守りシステムを開発し、2019年8月に製品化されました。

ニーズに応じた見守り支援機器を選択することで、対象者の生活の質の向上や介護者の負担軽減に効果をもたらすでしょう。